# 歴史小説論序説（2）

小倉孝誠

## ロマン主義時代の歴史小説

王政復古期(1815－1830)に、小説と歴史叙述が虚構と真実として排除しあうのではなく、豊かな競合関係を生きていた、ということをわれわれは前稿で示した。両者は、ともに認識と語りの圏域に属するディスクールとして、人間の経験と社会性を把握するための異なる二つの様式とみなされたのである。それ以前の文化体系のなかであれば、形容矛盾の汚名をまとわせられたかもしれない「歴史小説」は、かくして正当な文学的市民権を要求することができた。

ギゾーやティエリに代表される自由主義派の歴史学がもたらした革新の一つは、君主や王侯の年代記を書きつづるのではなく、諸々の社会階層のあいだに作用する力学を明らかにしようと努めたことにある。彼らは、歴史の流れを集団相互の抗争という視点から捉え直そうとしたし、古典派の歴史学によって無視されていた匿名の民衆に、歴史的な存在を付与したのだった。同様に、歴史小説もまた多くの場合、民族の対立や階級の葛藤を物語り、そこで個人は自分が帰属する集団の力学と運命に一体化し、それらを具現することになる。歴史学と同じ資格において、歴史小説は歴史の解読に有益な貢献ができると自負するのである。それは1820年、ティエリがこの文学ジャンルの始祖ウォルター・スコットの作品に関して、すでに承認していたことであった。18世紀イギリスの歴史家たちは、凡庸な政治哲学の図式を用いることにより、中世イギリス史の核となるノルマン人とサクソン人の争いを歪曲してしまった、と『歴史研究十年』の著書はいう。それに反して、『アイヴァンホー』の作家は、両者の争いを現実的で正しい視野のなかで復元してみせた。「ウォルター・スコットは、事実の検証に深く入りこんで、対立する利害関係と異質な生活様式を明らかにし、互いに反発する人間

諸集団、二つの国民、二つの言語そして風俗をわれわれに示してくれている[1]」。

歴史学の領域においてウォルター・スコットがもたらした寄与は、対立と緊張の空間を歴史上の個人にではなく、集団の相互関係のなかに設定したことである。ロマン主義時代のフランスの作家たちは、『ウェイヴァリー小説群』の作者から強い衝撃をうけつつ歴史小説の分野で彼と競おうとした。この時代の主要な歴史小説作家たちは、物語の空間を、根本的に相入れない二つの陣営が対峙していた時期に設定し、その抗争を主題論的展開の支えとした。例をあげるのはむずかしいことでなない。フランス革命期を背景とするバルザック(1799－1850)の『ふくろう党』(1829)と『暗黒事件』(1843)における王党派と共和派、1572年の聖バルテルミーの虐殺を主要なエピソードとするメリメ(1803－1870)の『シャルル九世年代記』(1829)のなかのカトリックとプロテスタント、そしてヴィニー(1797－1863)の『サン＝マール』(1826)では貴族と王権。しかし、和解を望みえない熾烈な闘争を描く技法はそれぞれの作家によって異なるし、その差異は、とりわけ実在の人物の形象化において、あざやかに露呈する。

『サン＝マール』は小説家ヴィニーの代表的な作品であるばかりでなく、同時にフランス・ロマン主義が生み出した最良の歴史小説の一つに数えられよう。この作品は、トゥーレーヌ地方出身の貴族サン＝マール(1620－1642)の陰謀事件を中心としながら、フランス17世紀前半の政治状況を形象化している。古くからの帯剣貴族の家系をつぐサン＝マールは、パリに出るとやがて国王ルイ13世の寵遇をえるようになり、時の権力者リシュリュー枢機卿と対立する。一時は、国王とその弟ガストン・ドルレアンの暗黙の諒解を頼みに、リシュリューを除こうと画策するが、やがて陰謀が露見し挫折すると国王一家から見放され、若きサン＝マールは友人のド・トゥーとともに、リヨンの町で断頭台の露と消えるだろう。それは、リシュリューによって中央集権化が推進され、その過程で王権が中世以来の貴族階級を弱体化させていくという、歴史的推移を象徴的にしめす出来事であった。彼みずから没落した貴族の系譜につらなり、フランス大革命とナポレオン帝政ゆえに、貴族が加速度的にかつての威信を失っていく時代を目のあたりにしていたヴィニーが、そこに同時代の悲劇のはるかな淵源を見たとしても、何の不思議もないだろう。すぐれた歴史小説は、決して単なる異国趣味に彩られた絵巻物ではなく、常に作家の同時代についての問いかけに裏打ちされているから

だ。

『サン＝マール』の冒頭の数章では、パリに向かう主人公が途中の町ルーダンで、有名な司祭ユルバン・グランディエの裁判と火刑に立ちあう場面が語られている。物語のなかでは1639年の出来事として位置づけられているが、実際にはそれよりも数年前に起こった事件であった。リシュリュー卿の台頭を印象づけ、ひいては最後に主人公を襲うことになる運命を暗示するために、ヴィニーが意識的におかしたアナクロニズムのひとつである。才気豊かで、かなり自由主義的傾向の強かったグランディエは、ルーダンの町で司祭としての名声を享受していたが、当地のウルスラ会派修道女たちを悪魔憑きにした、という罪障のもとに生きながらにして火刑に処された人物である。

今日では、リシュリューとその一派が巧妙にしくんだ陰謀というのが定説であるが、世俗的な権力と宗教的な権力の陰微な関係を浮彫りにし、「理性の世紀」における妖術裁判と異端審問の典型的な一例であるこの事件は、その後も作家や歴史家の想像力を駆りたてることになった。たとえば、ミシュレは『魔女』(1862)の一章でこの異端審問の悲劇を跡づけたし、現代の歴史家ル＝ロワ＝ラデュリは、この出来事について一書をつづっている。イギリスの作家で『ルーダンの悪魔』(1952)の著書オルダス・ハクスレーは、妖術裁判のうちに不寛容なイデオロギーの悪弊という、きわめて20世紀的な主題までも読みとることになるだろう。ちなみに、17世紀のフランスでは魔女裁判が頻発しており、フーコー流に言えば、それはまさに「古典主義時代における狂気」の一形態にほかならなかった。ルーダンの事件と同じくらいにスキャンダルをひきおこしたエクスの妖術裁判(1611)は、ゴーフリディ神父と尼僧たちを当事者として、類似した構造と推移をしめし、ゴーフリディもまた残酷な拷問にかけられた後、火刑台に上る。この一件は、現代フランスの作家レーモン・ジャンの小説『暗い泉』*La Fontaine obscure*(1976)に素材を提供することになった。悪魔憑き現象を生み出す深層の集合心性、魔女をめぐる歴史的想像力などは興味深い主題だが、今はそれを詳述するいとまがない。

ヴィニーの『サン＝マール』に立ち戻ろう。サン＝マールをはじめとして、ルイ13世、リシュリューなど著名な歴史上の人物を物語の中枢にすえたヴィニーは、この点においてウォルター・スコットの代表的な歴史小説の手法から離れ、挑戦状をつきつけたと言えよう。架空の作中人物がまったく不在というのではないが、小説の主要な筋

だてからは排除されている。彼らは、歴史によって野心と情熱の一定の圏域に組み込まれている実在の人物たちの運命に対して、いかなる拘束力も発揮することがないからである。重要な例外は、主人公の恋人マリーだろう。サン＝マールは、リシュリュー打倒という政治的な目的と、マリーとの愛という個人的な幸福を、自分の生涯において和解させようとする。その試みの挫折は、政治あるいは国家によって引き裂かれる愛、というような通俗的な構図におさまるものではなく、むしろ私的な領域の公的な領域に対する隷属を証拠だてる。サン＝マールの野望が風化していくのにつれて、マリーの愛もまた消え去っていくのは決して偶然ではない。マリーは、自分の恋人の高貴さを理解できず、したがって彼にはふさわしくない女性として描かれている。ヴィニーは、国家理性に対抗しうるだけの物語的存在感をもつ作中人物を創造することには、成功しなかった。

誰にも知られていない匿名の声を響かせるのは、作品のなかに散発的に登場してくる群衆である。無定型で、複数の意志をつきつける群衆は、歴史小説には不可欠の存在なのだ。『マン＝マール』においても、先に言及したユルバン・グランディエの裁判と殉教の場面に群衆は現われ、主人公はそのなかにまぎれ込んでいる。作品の末尾で、サン＝マールがリヨンのテロー広場で断頭台に上がる時、群衆は再び叫び声とつぶやきを発する。その同じ日、パリの宮殿では、リシュリューがおのれの磐石の権力を誇示するために壮麗な饗宴を催し、パリの民衆はその周囲に群がってくるだろう。しかしながら、ここでは群衆は行動の主体ではなく、したがって歴史の主体ではない。その機能は、受動的な享楽と見つめることに終始しているのだ。『サン＝マール』において、民衆は歴史を作るのではなく、歴史に立ち会うにすぎない。彼らが行動にとりかかることがあるにしても、統一的な目標をもった有機的な集団を形成するどころか、無秩序な「ごろつき」に変わってしまうのである。国王派とリシュリュー派の小ぜり合いを物語る第14章においては、雑然とした群衆が国王派の助けに駆けつけるのだが、その行動と構成要素は、このとりあえずの援軍の真の性格を露呈させるだろう。読者がそこに見るのは、「パリの賢明な民衆[2]」とは似ても似つかぬ、無謀で嫌悪をもよおさせる「賤民」にほかならない。架空の作中人物は、それが個人であれ集団であれ、作品の前景で本質的な役割を果たすことはない。軍隊、宮廷、そして貴族のサロンが歴史の基本的な素材を提供し、歴史の主体としてわれわれの前に立ち現れるのだ。

このようなヴィニーの技法の対極に位置するのが、歴史小説作家としてのメリメやバルザックの技法である。『シャルル九世年代記』のなかで、16世紀フランスのカトリックとプロテスタントの内乱を物語ったメリメは、国王シャルル9世や、その母カトリーヌ・ド・メディシスなど実在の人物を描きこんでいるが、その描写に費やされるページは少なく、彼らが説話論的に中枢の機能をになうことはない。中心人物はベルナール・ド・メルジーとジョルジュ・ド・メルジーという、創造された二人の兄弟であり、物語は彼らの行動を跡づけながら、彼らの身に生起するさまざまなエピソードの集積として、読者に提示される。二人の兄弟が、カトリック陣営とプロテスタント陣営にそれぞれ分れて対峙することが、作品に緊迫感を与えているし、カトリック教徒とみずから宣言しながら、実際は懐疑的な無神論者であるジョルジュは、ファナティックな宗教戦争の時代にあって、異なる諸集団の価値感や大義名分を相対化するのに貢献している。

語り手と読者の対話形式をかりて綴られた第8章のなかで、『シャルル九世年代記』の作者は、シャルル9世、カトリーヌ・ド・メディシス、アンリ・ド・ナヴァール(後のアンリ四世)、その妻マルグリットなど歴史上の人物の肖像を入念に描いてほしい、という読者の願いをあからさまに揶揄している。「なぜあなたは、私の小説のなかではいかなる役割も演じない人々のことを知ろうとするのか[3]」。「いかなる役割も演じない」というのは誇張だが、いずれにせよ、歴史上の人物は決して説話的機能をこえてまで特権化されることはない。実在の人物に関して言えることは、作品中で語られている歴史上の出来事にも妥当する。メリメは確かに、聖バルテルミーの虐殺や、カトリックとプロテスタントの間で繰りひろげられたラ・ロシェルの壮絶な戦いを描いているし、それらはこの作品のなかでもっとも有名なエピソードにもなっている。しかし、この出来事は架空の作中人物たちの個人的なドラマや葛藤を展開させるための説話空間として配置されたのであって、出来事の全体像を再構築することは、メリメの意図ではなかった。

歴史上の人物と事件に対するこのような振舞いは、小説の単なる技法の問題を超えて、作家自身の歴史観について証言してくれるはずである。『シャルル九世年代記』の

序文のなかで、メリメは、聖バルテミーの虐殺に関して、ロマン主義時代に広く流布していた通説に真向から対決する解釈を大胆にも提出していた。「この大虐殺が、一部の臣民に対して国王が仕組んだ謀略の結果ではない、ということはすべてが証明していることのように私には思われる。聖バルテルミーの虐殺は、民衆蜂起の結果発生したものであり、突発的で、予期しえなかった[4]」。国王一派による陰謀説を反駁し、事件の民衆的次元と偶然の介入を強調すること。歴史の謎とその解決は、宮廷の政治的権謀術数とは別の空間に探し求められねばならない。このような歴史意識に根ざす時、実在の人物の役割が極小化されるのは当然であろう。16世紀のフランスを和解しがたい二つの陣営に分裂させた宗教戦争は、かくして、カトリーヌ・ド・メディシスとコリニー提督の権力争いとして形象化されるのではなく（それは、たとえばハインリヒ・マンが彼の歴史小説『アンリ四世の青春』(1935)のなかで行ったことである）、ベルナールとジョルジュの悲劇的な運命によって表象されるのである。

バルザックがみずからの小説美学を確立していく過程で、ウォルター・スコットに多くを負ったことはよく知られている。『人間喜劇』の作家になる以前の若きバルザックによって書かれ、そのうちの幾篇かは未完のまま残された初期作品からも、彼の歴史小説に対する並々ならぬ執着が看取されよう。『人間喜劇』全体を見渡してみると、『哲学研究』には中篇小説くらいの長さの歴史物語がいくつか収録されているし、『政治生活情景』や『軍事生活情景』を構成する諸作品を研究するに際しては、歴史小説の美学がもたらした寄与を無視することはできない。生涯を通じてバルザックは、ウォルター・スコットと競合するに価するだけの一連の歴史小説を生産する夢を抱き続けたのである[5]。

作品中における歴史上の人物の形象化に関して言えば、『人間喜劇』の作家は、メリメの手法を継承し、深化させていく。『政治生活情景』の中の一篇として、第一帝政下における貴族の不遇と勇気を物語る『暗黒事件』は、作家自身の言葉によれば、「私生活と政治警察の角逐、そして政治警察のおそるべき行動[6]」を叙述しようとした作品である。そこでバルサックは3人の歴史的人物、しかも第一帝政期の政治史を語る上で不可欠の人物を登場させている。すなわち、ナポレオン、フーシェ、タレーランである。

だが、彼らが作品の前面に浮上してくるのは、架空の作中人物たちの行為と心理に直接的な影響力を及ぼす限りにおいてのみなのだ。彼らの説話論的存在は、われわれが彼らに認知している、客観的に測定できる歴史上あるいは政治上の役割によって決定づけられるのではなく、架空の作中人物の私生活との接触の密度によって規定されている、と言えるだろう。したがって、歴史上の人物が物語のなかに姿を現わす時は、つねに架空の作中人物に伴われていて、両者は同一の説話空間を生きることになる。

例をあげるのは、難しい作業ではない。主要人物の一人であるマランは、ナポレオンとフーシェのもとに駆けつけて、王党派の亡命貴族を代表するシムーズ家やオートセール家の運命を決定する。また、時の外務大臣タレーランの忠告にしたがって、シャルジュブフ侯爵とローランス・ド・サンク＝シーニュは、イエナの戦場にいるナポレオンに直接会いに行き、無実の貴族たちの救済を直訴する[7]。もちろん、歴史上の人物と架空の作中人物の劇的な遭遇を捏造するのは、歴史小説によく見られる工夫である。ユゴーの『ノートル＝ダム・ド・パリ』(1831)では、囚われの身となった主人公グランゴワールがルイ11世の前に引き出される場面をわれわれは読むし、『九十三年』(1874)においては共和派の作中人物シムルダンが、パリ郊外の居酒屋でロベスピエールやダントンと会見する挿話が語られている。このような出会いの場面や、歴史上の人物と作中人物に同じ言語を語らせることを、安易な技法として糾弾する人々もいるが、『暗黒事件』のなかでは、この技法は架空の作中人物に歴史的な密度を付与し、同時に実在の人物たちを虚構化することに成功している。バルザックは、ナポレオン帝政期を彩る人間たちを物語の中枢にすえることなしに、ナポレオンに対する王党派の陰謀と、政治警察の復讐を喚起した。歴史的現実は確かに深く組み込まれているが、小説の美学的要請に従属させられているのである。

歴史と物語の融合、あるいは歴史の虚構化は、『ふくろう党』とともにより一層徹底した形をまとう。1799年におけるヴァンデ地方の蜂起を語るこの小説からは、歴史上の人物は完全に排除されている。王党派の首領モントランを籠絡するためにマリー・ド・ヴェルヌィユを派遣し、そのマリーを監視するためにコランタンを送り込むのは、確かに時の警視総監フーシェなのだが、彼自身小説のなかに姿を現わすことは決してない。物語が始動する以前に決定されていた指令の発信者であるフーシェは、物語のなかでは不在の人間であり、一つの名前に過ぎない。中央権力の担い手の一人である彼

は、バルザックの作品においては、作られつつある歴史の過程からは、限りなく遠くに位置する周縁的な存在なのだ。共和国軍と王党派の闘争の形象化は、虚構の作中人物たちの個人的振る舞い、あるいは集団的行為によってもっぱら支えられている。延命を計ろうとする王政の心情とイデオロギーを体現するのがモントランならば、革命派の理想を純粋に代表するのはユロである。政治の舞台で対立する集団の力学を示す、典型的な人物を媒介させることによって、バルザックは革命史の重要な一側面を照らし出している。

しかし、『ふくろう党』は歴史小説であるばかりでなく、同時に一篇の恋愛小説でもある。物語のこの二つの次元を分節化させるのは、虚構の人物である。すなわち、フージェに派遣された女スパイであり、モントランの愛人となるマリーは、歴史とフィクションの接点に生棲している。歴史の道具でありながら、愛の主体でもある彼女は、その運命を通して、個人の生の一回性がいかにして歴史の運動に抵抗するかを例証した、と言えるだろう。愛は歴史の内部にその出発点をもち、その悲劇的な終焉もまた歴史のなかで完遂する。マリーとモントランの不可能な愛は、共和派と王党派の和解の不可能性を象徴的に物語っているのである。

## 歴史解読への志向

歴史小説は、歴史によって提供される素材のうえに、ロマネスクな物語を織り込むだけでは満足しない。それはまた、歴史的過程の読解に寄与できると自負し、歴史叙述と競合しようとさえするだろう。ロマン主義時代の歴史家たちは、歴史の全体を諸々の集団の抗争の外在化として把握できる、と考えていた。ティエリのように第三身分の台頭と興隆を強調することもあれば、ギゾーのように「文明」という概念を、歴史的説明の基本要因とみなすこともできた。いずれにせよ、彼らにとって歴史は解読可能な現象であり、18世紀末から19世紀初頭にかけての政治的、社会的地殻変動は、その解読可能性をいささかも損なうものではなかった。同じようにして、歴史小説の作者たちもまた、歴史の解明に貢献しようとした。歴史家と作家は、異なる方法と手段を援用しながら同一の目標を設定したのである。

したがって、歴史小説がじつに多くの場合、序文や序言をともない、そのなかで作

者が自分の文学理念のみならず、自分の歴史観や歴史家としての野心を披瀝するのは偶然ではない。一般に、序文は、作品の起源や生成過程、あるいは執筆の動機を報告することが多いのに反して、ロマン主義時代の歴史小説の序文が強調するのは、歴史に対する作家の態度表明である。しかも、歴史小説が歴史小説として読まれ鑑賞されるためには、どの時代のどの社会が描かれているのか、読者によって了解されていなければならないから、作家は時に、物語の歴史的文脈に関する解説を付加することもある。歴史小説は、作家と読者の間に、一定の知識が共有されていることを前提としてはじめて成立する文学ジャンルであり、その意味でも、知と想像力の遭遇を証言する特権的な文学空間にほかならない。

『サン＝マール』第4版(1829)の序文として書かれた「芸術における真理についての考察」のなかで、ヴィニーは、事実の現実性と出来事の意味をはっきり区別している。事実の真正さを期すことは、それだけで歴史叙述の価値を保証することにはつながらず、さらに「大きな論理的意味」を発見しなければならない、とヴィニーは言う。歴史の真実は、出来事の総体的な流れのうちに探し求められるべきであり、実在した歴史上の人物だけが、その真実を所有しているわけではいささかもないのだ。

> 「歴史とは、民衆がその著者たる一篇の小説である。ひとつの時代の一般的性格に関してのみ、人間の精神は真理を求めるように思われる。とりわけ重要なのは、出来事の集合体であり、個人を押し流していく人類の偉大な足跡なのだ[8]」

メリメは『シャルル九世年代記』の序文のなかで、歴史家として振舞う。一方では、先に述べたように、聖バルテミーの虐殺が民衆の暴動だった、という仮説を提出し、他方では、「ある時代の風俗と特徴のありのままの表現[9]」を見い出しうるような逸話を好む、と主張する。『ノートル＝ダム・ド・パリ』の『決定版に付されたノート』(1832)において、ユゴーは中世建築に関する「歴史の体系」を理解している読者を期待した。歴史を解釈し、知の圏域に参入しようとするこのような思思は、『人間喜劇』の作家においていっそう顕著にあらわれている。『ふくろう党』の生成との深い結びつきが指適される『ガの序文』は、1829年の時点で、バルザックがすでに新しい歴史認識を抱懐していたことを鮮やかに示している。彼は、国王よりも民衆により注意深い視線を注

ぐ歴史叙述を希求し、王侯貴族にまつわる政治史や制度史を特権化する年代記から明確に差異化された、風俗と精神を記述する歴史を夢想する。なされるべきは、

「国王は民衆を通じて、民衆はその精神をより強く刻印された幾人かの人物によって表現すること。そして、諸世紀を通じて営まれてきた生活の無限の細部を描き、誇張された宗教的ファナティズムが生み出した社会的動揺を示すこと。つまり、歴史叙述をたんなる死者の思い出の集積や、うわさ話や、国家の戸籍簿や、無味乾燥な年譜に還元しないようにすることが必要なのだ[10]」

『ふくろう党』の基本的な構想を語る、その初版の序文で、バルザックはヴァンデ地方の内乱について重要な史実はすべて考慮に入れた、と断言する。ただし、そのような史実の正確さは、時代精神の構築によって息吹きを付与される時に初めて、その有効性を発揮するだろう。彼自身、深い敬意を払っていた自由主義的歴史学の理念にくみしながら、バルザックは綜合的な歴史把握を志向していた。

「今日、歴史学がその書物のなかで繰り広げている偉大な教えは、国民的なものになるべきだ。数年前から才能に恵まれた人々が実践してきたこの方法にしたがって、著者(=バルザック)は、この書物において、ひとつの時代と出来事の精神を表現しようと試みた[11]」

## 歴史の透明性という神話

これまで分析してきた作品は、異なる主題を取り扱い、異なる時代を形象化する。物語のなかに歴史を書き込んでいく方法もまた、多様である。そのうえ、作者たちはさまざまなイデオロギー集団に帰属しており、したがってその歴史認識も共通ではない。それにもかかわらず、彼らは一つの意識を共有していて、それが小説創造の根幹をささえている。歴史小説は歴史の読解に寄与できるし、歴史的な知の生産にも関与できるし、歴史性の境界を超える人間性について真実を啓示することができる、という意識である。1815年から1832年のあいだに刊行された、数多くの歴史小説の前書きや序

文を調査したクロード・デュシェは、ジャンルの隆盛をもたらした暗黙の原理を次のように定式化してみせた。

「破滅的なものであれ、あるいは幸福感に満ちたものであれ、歴史の現実は読みうるし、意味をもち、方向づけられている。小説のエクリチュールにとって、歴史は絶対的な指向対象であり、自然論理を含む[12]」

歴史は複数の解釈を許容し、ひとは歴史に多様な意味付けをすることができる。しかし、その複数性や多様性は歴史の解読可能性をいささかも妨げはしない。歴史は、ロマン主義の世代にとって、合理的な現象であり続けたのである。

歴史学の領域において、オーギュスタン・ティエリ以上に歴史の合理性を強く唱導したものはいない。ティエリやその他の自由主義派歴史家にとって、フランス革命は、歴史的変遷の論理にきっちりとあてはまる出来事であり、純粋理性と社会正義の外在化にほかならなかった。「この革命のために定められていた時が、ついに到来した。それは、12世紀に始まった社会の再生という大きな運動の、決定的な結末ではないにしても、少なくとも現時点における最終段階である[13]」。フランス革命は不可避だったのであり、その過激な突出は断罪するにしても、その本質的な原理と正当な結果は受けいれなければならない。フランス革命は、それまで抗争状態にあった社会の諸階級の和解に道をひらくはずだった。ところが、1815年に始まる王政復古が歴史の論理的連続性をやぶり、和解に至る道は閉ざされてしまった、とティエリは嘆く。「ルイ18世は、もはや再びめぐってこないような、千載一遇の機会をとり逃した。憲章を公布した時でも、彼は、フランスの現在と過去、純粋理性と歴史の平等で決定的な協約、という想念にまでたどりつくことはなかった[14]」。ほとんどヘーゲル流の歴史哲学を思わせるような言葉だが、語っているのはフランス・ロマン主義期の一歴史家である。歴史と理性が結合する可能性を粉砕した王政復古時代は、歴史がフランスに課していた使命にそむいてしまった。「王政はもはやその役割を果たしえず、国家全体と一体化することができなかった[15]」。王政復古期は、遅かれ早かれ、別の体制にとってかわられるだろう。

事実、ティエリらによれば、1830年の七月革命は、1789年に端緒が開かれた運動を

継承するものであり、15年間の空白期間をおいて、フランス革命の精神と理想を聖別する出来事だったのである。国民大衆の支持によって誕生した立憲王政は、たんなる政治事件ではなく、歴史の必然性を確認する政体にほかならない。ブルボン王朝にブルジョワ立憲王政がとってかわった、という事実は、盲目的な反動に対する歴史的理性の勝利を証言するものではないか。「栄光の３日間」は、破綻したかにみえた歴史の法則を復活させたのではないか。1840年に書き綴られ、われわれが今日、ティエリの『フランス史に関する考察』という書物に読みうる次のようなテクストは、自由主義的歴史哲学をあますところなく露呈させている。

「1830年の革命、その迅速さによって、そしてまた一瞬たりとも目的を踏み越えなかったゆえに素晴らしいこの革命は、フランスの社会秩序を、1789年の偉大な運動へと決定的に結びつけた。現在、すべてはそこに由来する。政体の原理も、権力の起源も、主権も、そして国旗の色も[16]」

七月革命は、それ以前の革命運動の意味と方向を定着させ、現在の状況を正当化する。歴史の流れは一貫性を取りもどし、事物の秩序と合致する。歴史は透明である。1830年に頂点に達した歴史は、それ以降、すでに描かれた軌跡の上をなぞっていくだけでじゅうぶんなはずだった。ロマン主義期に書かれた歴史小説が、激動の時代を形象化しながらも、歴史の解読可能性に一貫して信頼をよせつづけたのは偶然ではない。それは、文学と歴史学が不安のない蜜月を生きた、幸福な時代であったと言えるかもしれない。しかし、このようなユートピア的歴史認識は、やがて根底から揺るがされ、歴史小説の文法と構造も大きな変革をこうむることになるだろう。

## 1848年――自由主義的歴史観の凋落

19世紀前半の重要な思想的潮流である自由主義イデオロギーは、フランス革命の正当性を主張し、市民階級の政治的、社会的上昇が、歴史の避けがたい流れだとした。もちろん、ジョゼフ・ド・メストルやボナルドに代表されるような反革命思想も、一貫した底流としてそれなりの支持をえてはいたが、七月王政期(1830－1848)にもっとも強

いインパクトを及ぼしたのが、自由主義であったことは否定できない。

しかし、ここに一つの逆説が生まれる。中世から18世紀末までの歴史を、絶えざる発展と進歩の過程とみなす自由主義的歴史家たちは、同時代の現実に直面した時きわめて静的な認識しかもちえず、民衆すなわち「第四身分」の政治的、社会的主張に対しては多少の苛立ちを覚えはするものの、全体としては無理解を示したにすぎなかった。かくして、七月王政を崩壊させた1848年の二月革命は、彼らにとって理解しがたいまったくの突発事件であり、不幸な偶然にほかならない。ただ一人トクヴィルを除いて、彼らは二月革命が提出した新たなイデオロギー上の与件を、歴史の運動のなかに組み入れることができず、彼らの歴史体系は、同時代の可視的な現実を目のあたりにして無残にも潰滅するだろう。二月革命は、彼らがフランスの歴史に認めてきた合理性を、突如として混乱させてしまった。歴史の過程は、今や理解しがたいものとなり、自由主義派の歴史学は、現在を説明することができない。彼らの狼狽ぶりを語るテクストを、いくつか引用してみよう。まず、著名なフランス革命史の作者であるミニェ。

「私たちは今、驚くべき状況におかれています。歴史がこのようになったことは、いまだかつてありません。精神はそのために動揺していますし、今まであったものと、現在あるもののあいだに類似点がないので、これから何が起こるか予想することもできません[17]」

これまで何度か言及してきたティエリもまた、彼の最後の著作『第三身分の形成と進歩の歴史に関する試論』(1853)の序文のなかで、1848年の衝撃を次のように回顧する。

「私は自分の力に応じてゆっくりと続けてきた仕事に専念しながら、しばしば論争のまとになった18世紀という時代を、心静かに研究していた。するとその時、1848年2月の大事件が勃発した。私は二通りの意味でそのショックを受けた。まず市民として、それから歴史家として、である。最初の革命(フランス大革命のこと――小倉)の最悪の時と同じような精神と脅威にみちたこの新たな革命により、

フランスの歴史は、フランス国そのものと同じくらいに混乱させられたように思われた[18]」

フランスの自由主義的歴史家たちにとって、1848年は、歴史の解読可能性が失われた瞬間である。1830年は、国民の統一を最終的に実現したわけではなく、歴史と理性の和解をうやうやしく聖別したのでもない。歴史はその運動をやめることなく、新たな階梯にふみだすが、それはティエリらの理論的射程をこえる問題であった。

同じ頃、異なる視点からフランスの現代史をとらえようとする一群の歴史家がいた。あるいは詩人として、あるいは社会主義者として、あるいはまたコレージュ・ド・フランス教授として、すでに無視しがたい名声をかちえていた彼らは、まるで示し合わせていたかのように、1840年代になるとフランス革命史家として世論のなかに立ち現われる。ラマルティーヌ、アルフォンス・エスキロス、ルイ・ブラン、ミシュレ、そしてキネの革命史は、すべて七月王政末期に刊行され、共和主義的史観や社会主義的史観を賦括することになったのである。彼らは、庶民階級の要求と、その存在様態を考慮にいれることが、歴史叙述において不可欠である、という意識をもっていた。ティエリも、真のフランス史はフランス人民の歴史たるべきだと考え、人民を歴史の主役とみなしつつ、人民の復権を計ろうとした。しかし、ティエリにあって「人民」という言葉は、貴族と対比させられるかぎりでの市民階級をさし示す。ところが、産業構造と経済構造の推移は、市民階級と民衆＝人民(le peuple)のあいだに深い溝を穿ちはじめていた。民衆という言葉の政治的、イデオロギー的負荷は、1848年前後を境として、顕著な変化をこうむることになった。19世紀前半のフランスでは、民衆と市民階級は貴族に対抗するかたちで、統一と連帯の幻想を生きることができたが、後半になると、社会的対立は何よりもまず、民衆と市民階級のあいだで尖鋭化することになったのである。

## フランス革命と歴史小説――デュマとエルクマン＝シャトリアンの場合

フランス革命をどのように叙述するかということは、たんなる歴史解釈の問題にとどまらず、19世紀に展開した社会変化にいかなる意味づけをあたえるか、という問い

に直結していた。19世紀のフランスは、フランス革命の意味と功罪をたえず問いつづけたから、それはつねに現在として自覚されていたのである。だからこそ、過去の時代の再構築であり、同時に、現在に向けられた視線の表現でもある歴史小説にとって、フランス革命は特権的な主題だったのである。目撃者や証人の数がしだいに減り、なまなましい記憶が薄れはじめた19世紀中葉以降、革命の歴史を風化と神話化の危機から救おうとする意識が生まれたとしても、なんの不思議もない。実際、19世紀後半以降、フランス革命を主題とする物語や戯曲は、数多く生産されることになるだろう。正統的な文学史がそのなかで特筆するのは、ユゴーの『九十三年』(1874)やアナトール・フランスの『神々は渇く』(1912)である。だが、これらの作品とは異質な文学空間で、やはり革命を形象化した一連の歴史小説の作家たちが存在する。これから論じようとするデュマ・ペールやエルクマン＝シャトリアンがその典型と見なされる「大衆小説」の作者たちのことだ。デュマは、『三銃士』や『モンテ＝クリスト伯』の著者として、その名は広く知られているから註を要しまい。それに反してエルクマン＝シャトリアンは、わが国ではまったく無名の(しばしば19世紀文学の研究者にとってすら)作家であろう。エミール・エルクマン(1822－1899)とアレクサンドル・シャトリアン(1826－1890)はともにアルザス地方の生れで、共同して数多くの作品を書き、特に第二帝政期から第三共和政初期にかけて、エッツェル社と出版契約を結んでおおいに大衆的成功をおさめた作家である(その点で、ジュール・ヴェルヌと似た経歴をもつ)。両者の姓を合わせて、彼らは自著にエルクマン＝シャトリアンと署名したのだった[19]。

デュマとエルクマン＝シャトリアンの作品の多くは、当時の新聞に連載され、その題材は過去の歴史からとられている。新聞小説は、市民階級や、教育の普及にともなって活字文化に接近しうるようになった民衆のあいだに、通俗的な大衆小説を流布させた、きわめて19世紀的な文学形式である。そこで、デュマやエルクマン＝シャトリアンの作品は、大衆小説であり、同時に歴史小説である、とみなされてきた。この定義づけは、しかし本当に正しいだろうか。

『フランス大衆小説史』(1980)の著者イヴ・オリヴィエ＝マンタンや、『大衆小説選集1836－1918)』(1985)を編纂したミシェル・ナタンは、デュマやエルクマン＝シャトリアンの作品にはまったく言及せず、その抜萃も採用されていない。オリヴィエ＝マルタンによれば、大衆小説と歴史小説は截然と区別される。前者は同時代の社会を説話空

間として、読者の興味をつなぎとめるためにしばしば荒唐無稽な筋立てを濫用し、主題論的には、善と悪、正義と不正、幸福と不幸、愛と憎悪、美徳と悪徳の対立という、単純な二元論の世界を描く。歴史は、大衆小説の特権的な主題ではないのだ。他方、制度的な文学史において、「歴史小説」についての章は、主としてロマン主義作家（ヴィニー、メリメ、ユゴーなど）を論じるばかりで、デュマやエルクマン＝シャトリアンにはほとんど触れていない。状況は、フランスでも日本でも同様である。つまり、彼らの作品は、「大衆小説」としても「歴史小説」としても、市民権を正当に公認されておらず文学の共和国のなかでは素姓のいかがわしい継子として扱われるという、特異な状況ができあがってしまった。

おそらくそれは、不幸な事態に違いない。彼らを復権させるのが筆者の意図ではないが、彼らの作品を、ほかならぬ「フランス革命と歴史小説」という章で分析するのは、二つの理由からである。

第一に、民衆のみならず市民階級のあいだにも多くの読者をもっていた彼らは、19世紀フランスの集団的想像力をかなりの程度まで代表するということ。新聞小説の作者である彼らは、読者のあらゆる反応に敏感にならざるをえなかったから、生産と消費の相互作用のなかで、彼らの小説は社会的想像力の形成にあずかったのである。

第二に、彼らの歴史小説は、フランス史に関する知識や情報を読者に伝達するという、きわめて教育学的な機能をになっていた。「フランス史」が学校の授業として導入されたのは、中等教育で1863年、初等教育では1867年になってからである。国民に、自国の歴史を教える制度が確立される以前において、デュマやエルクマン＝シャトリアンの作品は、無視しがたい教育的効果――それが肯定的なものか否定的なものかは、今は、問わない――を及ぼしたはずなのだ。

彼らの作品が、今日の学問的水準からいって、フランス革命史の刷新に寄与するところは、おそらくほとんどない。しかし、フランス革命が実際に何であったか、ではなく、19世紀のフランス人が革命をいかに表象していたか、ということもまた歴史の一部なのである。その表象が正しいか、誤っているかと問うのは、ここではさして重要なことではない。歴史は事実によってのみ形成されるわけではなく、人間が出来事をいかに理解、あるいは歪曲したかによってもまた、説明されるのである。われわれは、三人の作家を媒介として、歴史的想像力と集合心性の問題にかかわることになる

だろう。

## デュマの歴史小説

1840年代、生涯のうちでもっとも多産な時期にあったデュマは、フランス革命に題材をとった作品をやつぎばやに発表する。すなわち『赤い館の騎士』(1845－46)、そして『ある医者の回想』という総題をもつ『ジョゼフ・バルサモ』(1846－48)、『王妃の首飾り』(1849－50)、『アンジュ・ピトゥ』(1851)、『シャルニー伯爵夫人』(1852－55)の四部作である。

『赤い館の騎士』は、1793年3月から10月に至る緊張した雰囲気のパリを舞台とする。国民軍将校モーリスはある夜、通行証を所持していないためにサン＝キュロットたちに拘引されそうになった一人の女を救い、サン＝ジャック街に送っていく。一目惚れである。名も知らぬこの女に再会しようと、モーリスは数日後、同じ場所に赴く。彼女の夫ディクスメールは初め不信感をもつが、妻の恩人と知り、歓待の礼を尽くし、他方モーリスは愛する女性の名がジュヌヴィエーヴであることを知る。ディクスメールは、表向き数人の職人を雇って皮革工場を営む親方ということになっているが、実は彼らは秘かに、当時幽閉されていたマリー＝アントワネットの救出を画策している徒党であった(その一人モランが、「赤い館の騎士」という異名をもつ人物であることは、後に判明する)。モーリスが王妃の監禁されている牢獄の歩哨に立つ機会があると知ったディクスメールは、彼を利用して自分たちの企図を遂行しようと計るが、ジュヌヴィエーヴへの愛に心を奪われているモーリスは、そのことに気づかない。かくして、タンプルやコンシエルジュリにおいて、秘密の手紙、花束の計略、変装、隠れた地下道など、さまざまな術策を用いての王妃救出の試みがなされるが、すべて失敗する。やがてパリの革命自治政府は陰謀団の存在とアジトを嗅ぎつけ、彼らは四散する。1793年10月16日、マリー＝アントワネットは処刑され、彼女に恋していた「赤い館の騎士」は自らの手で命を絶ち、モーリスとジュヌヴィエーヴもまた国家反逆罪で断頭台に上る。

以上が作品の梗概である。物語がくり広げられる時間軸は、ジャコバン派とジロンド派の確執という革命史の重要な局面に対応するし、それについての記述も皆無では

ないが、それらはすべて断片的な註釈にとどまる。王党派の反乱、外国との戦争、マラーの死など、1793年を特徴づけた出来事には言及しないこの作品は、革命の全体像を提出しようとはしない。デュマは、1793年という象徴的で喚起力に富む年代を説話論的枠組として、歴史によって決定づけられはしない愛の物語を書き綴ったのである。

はじめは熱烈な共和主義者だったモーリスは、ジュヌヴィエーヴへの恋がつのるにつれて、革命の理想やイデオロギーから遠ざかっていくし、ジュヌヴィエーヴの方は元来、マリー＝アントワネット救出計画には関与していない。愛が進行するにともない、彼らの生はますます歴史的現実とは無縁になっていく。彼らは決して歴史の主体ではなく、歴史に翻弄される無力な個人にほかならない。「赤い館の騎士」の行為は、確かに幽閉されたマリー＝アントワネットの存在なしには説明されえないが、ここでもやはり、救出のための策謀は王妃への愛によって動機づけられるのであり、政治的含意はほとんどない。一人の女を解放するために行動する彼は、共和主義の原理に異議申し立てするわけでなく、革命的イデオロギーを呪詛することもない。彼の振舞いは、当時フランスの各地で勃発しはじめていた王党派の暴動とはいかなる関連も持たない、孤立した試みなのだ。

マリー＝アントワネットは、物語の多様な筋立がその周囲で織りあげられていく、鍵となる作中人物である。常に高貴で、誇り高い女性として描かれる彼女は、何よりもまず、処刑されたルイ16世の喪に服す未亡人であり、子供から引き離された哀れな母親の姿で、読者の前に立ちあらわれる。その姿と、王妃の実際の相貌との類似や差異を測定することは、さしあたり問題ではない。語り手の筆致は、マリー＝アントワネットをフランスを裏切った外国女としてさし示すこともなければ、民衆の不幸に対して冷淡な人間として際立たせることもない。彼女は敬意に価する女性であり、断頭台に送られる時でさえ毅然とした態度を崩さないだろう。

「王妃をのせた荷馬車が進むにつれて、彼女の冷たく暗い視線の下に、群衆の喚声もぴたりと止んだ。

これほど力強く、尊敬の念をひきおこしたような表情は、かつてなかったし、マリー＝アントワネットがこれほど偉大で、これほど王妃らしいことも、かつてなかった。矜持にみちた勇気を振りしぼった彼女は、周囲の人々に畏怖の念さえ抱かし

めたのであった[20]」

『赤い館の騎士』のなかのマリー＝アントワネットは、暴君の妃ではなく、歴史と政治の犠牲者の相貌をまとう。あるいはむしろ、彼女の存在は歴史的価値を失ない、歴史の外部に位置づけられて、一人の個人の資格で説話的機能をになうことになる。悲劇的な運命をたどった王妃――それは19世紀のフランスにおいても、20世紀の日本においても、大衆文学にとって恰好のヒロインであるに違いない。

作中人物の構図も、同じような原理にもとづいて決定されている。一方には共和主義者や民衆、他方には王妃の脱走を画策する集団がいて、王妃をめぐっての彼らの利害関係に妥協の余地はない。しかし、それぞれの集団について言えば、どちらも善と悪を体現する人物を含んでいる。共和主義者の陣営では、モーリスとその友人ロランの寛大さは、獄吏シモンの酷薄さに対立し、陰謀団の陣営では、ジュヌヴィエーヴや「赤い館の騎士」の純粋性がディクスメールの邪悪性と対照をなす。物語の緊張と劇的要素を保証するのは、作中人物の政治的、イデオロギー的立場決定ではなく、彼らの道徳的資質なのだ。すなわち、歴史は倫理の不在証明である。

『ある医者の回想』四部作のうち、フランス革命を物語の時代背景とするのは、『アンジュ・ピトゥ』と『シャルニー伯爵夫人』の二作である。1784年から1786年にかけて実際に起こった宝石横領事件を物語化した『王妃の首飾り』は、それに連座した王家の威信の低下を強調し、事件の張本人ラ・モット伯爵夫人の苔刑の場面では、物見高い群衆のなかにマラーとロベスピエールという名の男二人をまぎれこませて、きたるべき地殻変動を予示していた。『アンジュ・ピトゥ』の物語が始動するのはその3年後、バスティーユ陥落の前夜からであり、1789年10月のヴェルサイユ行進に至るまでの、革命の初期段階を描く。その直接的な連続性において、ほとんど同一の作中人物を登場させながら、1793年1月、ルイ16世の処刑までの物語を綴ったのが、最終作『シャルニー伯爵夫人』である。

二つの作品の説話論的推進役をになうのは、フランス北部ピカルディー地方からパリに出てきたアンジュ・ピトゥ、その友人で「農民哲学者」を自任するビィヨ、そして彼が仕える領主で、開明的な思想をもつジルベール医師の三人である（ピトゥは実在し

た歌謡作者（シャンソニエ）だが、デュマの小説に現われるピトゥは、彼の現実の生涯とは無関係に、一人の作中人物として造型されている）。ピトゥとビィヨは7月14日にパリに到着し、蜂起した民衆の列に加わり、バスティーユ攻撃でいきなり指導的な役割を演じてしまう。他方、『人間の自由と諸国家の独立について』という著書が、官憲の忌諱にふれてバスティーユに投獄されていたジルベールは、この時に解放されて、以後歴史の渦中に身を投じていく。『赤い館の騎士』と異なり、『アンジュ・ピトゥ』や『シャルニー伯爵夫人』は特定の人物や、限定された時期を特権化することはせずに、1789年から1793年に及ぶ革命時代のプロセスと推移を、その全体性において提示する。語り手は、物語を綴るだけでは満足せず、フランス革命の歴史を細部にわたって読者に教え、説明しようとするのだ。このような教育学的側面、あるいは啓蒙的な配慮は、作品を特徴づけるいくつかの次元において露呈してくる。

まず、デュマは革命の目撃者たちの回想録や、革命に関する歴史書にしばしば言及し、時には引用し、注釈を加える。とりわけ頻繁にその名をあげられるのは、ミシュレである。彼の記念碑的な『フランス革命史』は1847年に刊行が始まり、デュマが『アンジュ・ピトゥ』や『シャルニー伯爵夫人』を新聞に連載しているあいだも、刊行は継続中であった、という事実は記憶に価しよう。教育学的要素が1846年に出た『赤い館の騎士』において希薄で、今問題になっている二作のなかに鮮明に表われている理由の一つは、ミシュレの書物という＜間テクスト＞の存在であろう。デュマは明らかに『フランス革命史』を、ある時はかなり自由に、そしてまたある時はほとんど原文どおりに引用している[21]。高名な歴史家の著作に言及することによって、自分の歴史小説の史料的価値を主張しようとしたのかもしれない。しかし、いかなる特定の歴史観とも無縁なデュマは、ミシュレの共和主義的革命史観に同調するそぶりを見せず、ミシュレに対する負債は、主として喚起力に富んだ絵画的な細部の借用にとどまる。

第二に、語り手の啓蒙的配慮は、その網羅主義にあらわれている。1789年から93年に至るあいだに、パリで起こった主要な出来事はすべて物語られているし、それらの出来事に関与した実在の歴史的人物たちも、はっきりと命名されて登場してくる。歴史と虚構の物語の統合をはかるために話者が用いる手段は、3人の作中人物を歴史のあらゆる重大な瞬間に遭遇させ、歴史上の人物たちと接触させることである。革命勢力の側に加わったアンジュ・ピトゥとビィヨは、パリの民衆の指導者の一人となり、革命

的民衆の立場から、すべての大事件に立ちあう。他方、穏和な王党主義者であるジルベールは、ネッケルの仲介でルイ16世の顧問官の職を得るが、王政が生きのびるためには民衆との妥協が必要だとし、そのような既定方針がもたらす微妙な立場から、歴史の過程に参加していくだろう。彼らは、空白と不在を恐れる語り手が年表の項目を律儀にうめていくために、あたかも、革命史上の重要な事件と人物を網羅的に形象化するために用いる口実であるかにみえるのだ。フランス革命の略年表をかたわらに置けば、読書がおおいに円滑化されるのはまちがいない。物語は、教育的配慮に従属する。そのため、作中人物たちの説話論的地位は一定しない。ある時は歴史の主役であり（たとえば、アンジュ・ピトゥとビィヨはバスティーユ攻略の際、群衆の先頭に立つし、10月事件の時、ジルベールは国王にパリへ戻ることを勧める）、またある時は、語り手によって忘れられてしまったかのように、小説から完全に排除される。

そこで第三に、歴史の時間が物語の時間を支配する、という現象が起こる。小説の時間は、あらかじめ定められた歴史の時間、年表を繙けば誰もが確認しうる革命の年代記のうえに重ね合わせられていく。物語に特有の空白や沈黙がここにはないし、劇的緊張に貢献する説話論的な加速や減速、濃淡の交替などもきわめて希薄である。歴史の日付が作中人物の生涯を決定づけ、ロマネスクの構造を規定していくのだ。

革命の年譜において特筆され、フランス国民の集団的記憶のなかに組み込まれた大事件（バスティーユ陥落，10月事件，国王一家逃亡の試みとその失敗，群衆のチュイルリー宮への侵入，ルイ16世の処刑など）を特権化する一種の＜事件主義＞は、歴史の突出した空間を線条的につなぎあわせていく。そして、架空の作中人物たちの行動は、そのような突出した空間に設定され、多かれ少なかれ歴史の運動に奉仕するように描かれている。彼らの言動を叙述することが、同時に歴史を解説することになるのだ。一例をあげるならば、バスティーユ陥落は、民衆の蜂起の結果であると同じ程度に、アンジュ・ピトゥとビィヨがジルベールを解放するための試みの帰結、として語られている。他方、実在の人物は、その歴史的機能を果たすだけではたりず、説話的機能も求められることになるだろう。マリー＝アントワネットは王妃であり、かつシャルニー伯爵の恋人であり、したがってシャルニー伯爵夫人の秘められた嫉妬を誘発しなければならない。一方で、架空の作中人物の言動は歴史性をおび、他方で、歴史は虚構化される。デュマの歴史小説は、そのような往復運動によってささえられている。

ここに欠落しているのは、無名の民衆であり、匿名の群衆である。彼らは、確かに物語のなかに登場してくるのだが、たちまち固有の名をもつ人々によって抱摂されてしまう。デュマにおいて、歴史は固有名詞によって形成される実体なのだ。そして、民衆が大きな役割を演じようとする時には、たちまち「暴徒」や「賤民」に変貌してしまう。それは、デュマと、彼が援用したミシュレとの決定的な差異である。ミシュレは、民衆の逸脱と暴力を認めながらも、究極的には民衆はその同一性をたもち、革命と歴史の主体だとした。デュマの作品が「大衆小説」だとすれば、大衆小説はかならずしも民衆の肯定的なイメージを定着させようとするものではないし、大衆小説の主人公は、かならずしも庶民ではない。

## エルクマン＝シャトリアンとフランス革命

デュマの歴史小説は、結局のところ中産階級の視点から見られたフランス革命を描く。華やかで通俗的な描写が、小気味のよい会話の場面と相まって、それは時に、20世紀のハリウッドが生みだした「歴史スペクタル映画」を想わせもする。それに反して、エルクマン＝シャトリアンの作品は、下から捉えられた革命、民衆の視線を通して把握された革命を物語る。『国民と民衆のための物語』という総題のもとにまとめられている彼らの作品のうちで、フランス革命期を形象化した代表的なものは、『テレーズ夫人』(1863)と『ある農民の物語』(1868－69)である。

大きな成功をおさめ、著者の名をいちやく世間に知らしめることになった『テレーズ夫人』の背景は、1793年、フランスとプロシアの国境ヴォージュ地方の村アンシュタットである。村人たちのフランス革命についての意見は割れていて、公然とプロシア、オーストリアを支持する者まで出始めるなか、11月のある日、フランス共和国軍とオーストリア軍のあいだで激しい戦闘がくりひろげられ、アンシュタットの村は大きな被害をうける。村の医者ジャコブは、戦いがすんだ後、重傷を負った酒保係の女テレーズを見つけ、手当てする。父や兄弟とともに共和国軍に身を投じたテレーズは、熱烈な共和主義者、愛国主義者であり、貴族や専制君主を打ち倒すべきだと主張してやまない。彼女が体現する戦闘的共和国の理想に、はじめは穏健な平和主義を対立させるジャコブだが、自分たち二人がともに「ジャコバン派」として密告され、プロシ

ア軍に引き渡される危険が迫っていると知り、オッシュ将軍指揮下のフランス軍陣営までテレーズを送っていく。そこに滞在するうちに、ジャコブはやがて共和政の原理に賛同するようになり、野戦病院長に任命される。その後プロシア,オーストリア軍を撃破したフランス軍がアンシュタットの村にやってくると、住民はすべて革命の理想に帰依し、プロシアへの隷属から解放され、自由と平等と啓蒙の恩恵をうけるようになるだろう…。物語は、テレーズとジャコブの結婚によって閉じる。

『ある農民の物語』は、ロレーヌ地方ファルスブールに生まれ育った、農民にして鍛冶屋のミシェル・バスティアンの、1789年から1801年までの生涯を綴っている。フランスが諸外国と交戦状態に入ると、ミシェルは志願して共和国軍に入隊し、はじめプロシア軍と戦い、その後はヴァンデ地方に送られ、クレベール将軍の下、王党派と戦火を交えることになるだろう。やがてナポレオンが台頭してくると、独裁者を憎むミシェルは軍服を脱ぎすてて、故郷に引退する。

以上のように要約される二つの小説は、どちらも一人の作中人物によって語られる一人称小説である。『テレーズ夫人』の語り手は、フリッツェルという名の10歳の少年であり、『ある農民の物語』では、主人公ミシェル自身が語り手となって、自己の体験を叙述していく。語り手は、目の前に読者がいるかのような親密な口調で語りかけ、それが時には微笑を禁じえないような無邪気さを生み出すとともに、物語に独特の調子をあたえている。これは、エルクマン＝シャトリアンの全作品に共通する特徴である。革命は見られたり、生きられたりするばかりではない。革命はまた、語られ、そして聞かれるべきものなのだ。他人の声に耳を傾けること――それは、彼らの作品において、もっとも頻繁にくり返される仕草の一つである。そして、ここには物語の始源的なかたちがある、といえるだろう。

「私は民衆出の人間であり、民衆のために書こう」というミシェルは、自分の意図を次のように宣言する。

「1789年における、貴族に対する民衆とブルジョワの大革命の歴史は、多くの人たちによってかたられてきました。しかし、それは物ごとを上から見る学者や、才知ある人々によってでありました。私は老いた農民ですから、農民のことだけお話しいたしましょう。大切なのは、自分自身のことによく気をつけることです。

自分で見たことは、自分がいちばんよく知っています[22]」

エルクマン＝シャトリアンの作品は、外の世界や歴史が、民衆の慎ましやかな生とその日常性のなかにもたらす亀裂を表現する。その証人となるのは、民衆の一人である語り手自身である。民衆におそいかかる歴史の波紋を、民衆の観点から物語ること、革命の理念と実践が、農民や商人や職人におよぼす衝撃を喚起しながら、近代フランスの起源を模索すること――それが作家の目標であった。このような視点と作中人物の統一性は、大衆的な歴史小説にしばしばありがちな、物語による歴史の安易な歪曲から、『テレーズ夫人』や『ある農民の物語』を救うことになる。エルクマン＝シャトリアンにおける説話論的構築の脆弱さを嘆き、心理や欲動の分析の甘さを指弾したゾラも、彼らの作品が細部の描写にすぐれ、民衆の素朴な愛国心をみごとに定着させたことは認めていた。

「私は『テレーズ夫人』のすべてが気にいっている。若々しさと熱意、善良さと情熱、戦いの場面をよりよく際立たせてくれる風俗描写、そしてまさにうってつけの場にいるアルザス人たちが、気にいっている。くり返して言おう。この作品は、描写部分と物語部分のみごとな調和と、作品を形成する多様な要素の正しい結合のゆえに、一篇の傑作である[23]」

しかし、ミシュレやラマルティーヌの革命史の読者であり、第二帝政下において共和主義への支持を隠さなかったエルクマン＝シャトリアンは、物語るだけでは満足できなかった。10歳の少年フリッツェルや、一兵卒ミシェルは、自分たちが見たこと、感じたことを叙述することはできても、時代の全体を把握することはできない。物語の空間は限定されているし、主人公たちが体験できる歴史の圏域は狭いからだ。そこで、語りの視点の統一性を守りながら、革命の全体像を読者に示すためには、主人公を補い、時には彼を啓蒙してやる作中人物が不可欠になってくる。『テレーズ夫人』においては、パリから送られてくる新聞や雑誌を読み、アンシュタットの村人たちに情報をあたえるジャコブ医師がその役割をにない、『ある農民の物語』のなかでは、国民公会議員のショヴェルとその娘マルグリットがパリに滞在し、首都の出来事を詳しく手紙

(しばしば途方もなく長い手紙!)に書き綴ったり、あるいはロレーヌ地方に帰郷した時に、ミシェルに語ってきかせることになる。出来事を語る仕草と、歴史を俯瞰的に解釈する仕草は、交替で演じられることになるだろう。ジャコブ医師やショヴェルの話に耳を傾けるフリッツェル少年やミシェルは、エルクマン＝シャトリアンの小説の読者と相同関係にあり、物語の教育的機能はみごとに果たされる。

そればかりではない。啓蒙的配慮にうながされた作家は、作品のなかに、なまの史料をそのままの形で挿入するにいたるだろう。歴史家の振舞い、と呼ぶのがふさわしいこの行為は『ある農民の物語』のなかで実践される。すなわち、そこでは『ラ・マルセィエーズ』の歌詞や国民公会が発布した布告の条文が正確に復元されているし、第一部の末尾には「人権宣言」、第二部の末尾には1793年の憲法の全文が、それぞれ掲載されているのだ[24]。先にわれわれは、デュマがきわめて戦略的にミシュレのテクストを引用するのを確認したが、エルクマン＝シャトリアンにあっては、史料がほとんど一種の＜教材＞として物語に組みこまれている。

エルクマン＝シャトリアンの歴史小説が強調するのは、民衆の純粋な愛国心であり、共和国への愛である。語り手や、主要な作中人物はすべて共和政の価値体系にコミットし、プロシア軍、ヴァンデ地方の王党派、僧侶や貴族など共和政に敵対する者たちは、すべて無知で野蛮な者として、容赦なく断罪されるだろう。二つの作品において、女性が特権的な地位をしめているのは、偶然ではない。テレーズとマルグリットは、共和国の理想を語る二つの声であり、革命の民衆的理念を体現する二つのイメージである。歴史家のモーリス・アギュロンは、「共和国」、「祖国」、「自由」などを取り扱った政治的図象学や、イデオロギー的主題体系において、女性のイメージがいかに大きな位置をもつかを証明し、19世紀なかば以降、いかにして「マリアンヌ」がフランス共和国の象徴になっていったかを、みごとに示してくれた[25]。テレーズとマルグリットは、その立場と情熱によって、そしてまたその豊饒な肉体によっても、「マリアンヌ」の正確な文学的肖像にほかならない。

20世紀末の読者たるわれわれは、『国民と民衆のための物語』の作者たちの、図式的な教条主義や楽観的な啓蒙主義を笑うこともできよう。しかし、それは現代においても変わらぬ大衆文学の特質である。熱烈な共和主義を標榜するエルクマン＝シャトリアンの作品が、第二帝政期に書かれたこと、そのために彼らが帝国の官憲の忌諱にふ

れたことを忘れてはならない。

彼らの歴史小説の独創性は、歴史上の出来事や集合心性を、民衆の日常性と、真実味あふれる細部から構成される場面のなかに、組み込んだことにある。教育学的配慮に満ちたこの書物は、その独特の語り口と素朴さによって生きのび、フランス革命と共和国についての民衆的表象およびレトリックが形成されるうえで、重要な機能を果たすことになるだろう。他方、彼らの作品は、<民衆>の社会的復権と存在の認知のためには、教育の普及が必要だと主張する点で、第三共和政のイデオロギーとみごとに一致する。無償の義務教育が制度化された第三共和政期に、エルクマン＝シャトリアンの作品が、学校の図書室で特権的な場所を占有するようになったのは、偶然ではない。そのうえ、彼らの文学は思いがけぬ形で、聖別されることになる。『ある農民の物語』の主人公ミシェルがロレーヌの町ファルスブールに生まれ育ち、説話的展開も多くその近郊に設定されていることを想いおこそう。ところで、1877年、ブリュノという女性が刊行する『二人の子供のフランス巡歴』なる書物があり、そのなかで二人の主人公アンドレとジュリアンが旅立ち遍歴の末に戻ってくるのも、このファルスブールの町だ。第三共和政を通じて、小学校で広く用いられた読本教科書である、『二人の子供のフランス巡歴』は、二人の少年の勇敢な旅を物語の空間座標としつつ、「祖国」を可視的で手に触れうるものとなし、「市民」生活に必要な知識と規範の修得をめざす。そして、地理と歴史の学習が、「フランス」という観念を具象化する媒体として提示される[26]。ミシェルの故郷ファルスブールはかくして、共和主義的な公教要理（カテシスム）の出発点、すぐれて愛国的な空間として、不朽の名前になるだろう。

注

(1)　Augustin Thierry, *Dix ans d'études historiques*, Garnier, s.d., p.133.

(2)　Alfred de Vigny, *Cinq-Mars*, «Folio», 1980, p.252.

(3)　Mérimée, *Chronique du règne de Charles IX*, Garnier,1967, p.85.

(4)　*Ibid.*, p.17

(5)　Cf. René Guise, "Balzac et le roman historique. Notes sur quelques projets", *Revue d'Histoire littéraire de la France*, mars－juin 1975.

(6) *Une ténébreuse affaire, La Comédie humaine*, «Pléiade» t.VIII, 1977, p.492.

(7) *Ibid.*, p.597－598, 679 sqq.

(8) *Cinq-Mars*, p.25.

(9) *Chronique du règne de Charles IX*, p.11.

(10) *La Comédie humaine*, «Pléiade» t.VIII, p.1680.

(11) *Ibid.*, p.897.

(12) Claude Duchet, "L'illusion historique: l'enseignement des préfaces (1815－1832)", *Revue d'Histoire littéraire de la France*, numéro spécial «le roman historique », mars－juin 1975, p.246.

(13) Thierry, *Considérations sur l'histoire de France* (1840), Garnier, s.d., p.126

(14) *Ibid.*, p.156.

(15) *Ibid.*, p.161.

(16) *Ibid.*, p.196.

(17) 1848年3月3日付、ポレリ宛の手紙。次の書物のなかで引用されている。Yvonne Knibiehler, *Naissance des sciences humaines: Mignet et l'histoire philosophique au XIXe siècle*, Flammarion, 1973, p.395－396.

(18) Thierry, *Essai sur l'histoire de la formation et des progrès du Tiers－Etat*, Furne, 1853, p.X.

(19) エルクマン＝シャトリアンの生涯と作品の概要については次の著作が参考になる。Jean-Pierre Rioux, *Erckmann et Chatrian ou le trait d'union*, Gallimard,1989.

(20) Alexandre Dumas, *La Chevalier de Maison-Rouge*, Bruxelles, Editions Comlexe, 1989, p.497.

(21) たとえば、バスティーユ攻略を描いた次の二つのテクストを読みくらべれば、デュマの借用は一目瞭然であろう。

La foule était enragée, aveugle, ivre de son danger même. Elle ne tua cependant qu'un seul homme dans la place, elle épargna ses ennemis les Suisses,qu'à leurs sarraux elle prenait pour des domestiques ou des prisonniers; elle blessa, maltraita ses amis les invalides. Elle aurait voulu pouvoir exterminer la Bastille; elle brisa à coups de pierre les deux esclaves du cadran; elle monta aux tours pour insulter les canons; plusieurs s'en prenaient aux pierres et s'ensanglantaient les mains à les arracher. (Michelet, *Histoire de la Révotution française*, «Pléiade», 1952, p.159.

Un spectacle terrible s'offrit alors aux yeux de Billot et de Pitou. La foule ivre, enragée, furieuse, s'était ruée dans la cour. Le premier soldat qui lui était tombé sous la main, elle l'avait mis en morceaux.(•••)

C'était surtout aux Suisses qu'on en voulait particulièrement, mais l'on ne trouvait plus de

Suisses. Ils avaient eu la temps de passer des sarreaux de toile grise, et on les prenait pour des domestiques ou des prisonniers. La foule brisa à coups de pierre les deux captifs du cadran. La foule s'élança au haut des tours pour insulter ces canons qui avaient vomi la mort. La foule s'en prenait aux pierres, et s'ensanglantait les mains en voulant les arracher.(Dumas, *Ange Pitou*, Bruxelles, Editions Comlexe, t.I, 1989, p.276－277)

(22)　Erckmann-Chatrian, *Histoire d'un paysan*, Jean-Jacques Pauvest, t.l, 1962, p.5.

(23)　Emile Zola, "Erckmann-Chatrian" dans *Mes Haines* (1866), *Œuvres Complètes d'Emile Zola*, Cercle du livre précieux, t.10, 1968, p.135.

(24)　Erckmann-Chatrian, *Histoire d'un paysan*, t.1, p.509, t.2, p.168.

(25)　Maurice Agulhon, *Marianne au combat. L'imagerie et la symbolique républicaines de 1789 à 1880*, Flammarion, 1979.

(26)　この書物の文化的、政治的意義については、次の二つの論文を参照していただきたい。

Jacques et Mona Ozouf, "*Le Tour de la France par deux enfants*. Le petit livre rouge de la République" dans *Les Lieux de mémoire I. La République*, Gallimard, 1984. 田中正人、「『二人の子供のフランス巡歴』とその時代――第三共和政初期の初等教育イデオロギー」、谷川稔他、『規範としての文化』、平凡社、1990年。